

近藤潤三著

## 『ドイツ移民問題の現代史』

——移民国への道程——

木鐸社 二〇一三・七刊

A5 一五六頁 三〇〇〇円

「ドイツは移民国ではない」という標語が公式見解として述べられることは、現在ではほぼ皆無となった。「移民の背景を有する人びと」が、総人口八千二百万人のうち千五百万人を占めるまでになっており、ドイツは間違いなく「移民国」であると認識されるようになってきている。しかしこのように「移民」という言葉でひとくくりにすることで、見えにくくなる側面もある。それは「移民」内部の多様性である。旧ソ連から流入してきたドイツ系住民であるアウスジードラー、東ドイツから流入してきたユーバードラー、第二次大戦末期以降に東欧から逃れてきた避難民・被追放民、そして外国人労働者。この主要四集団だけ見ても、その歴史的経緯は実に多様かつ複雑である。本書は、「ドイツ近代史に起因する特殊性を濃厚に帯びている」そうした移民問題について、一九九〇年までの歴史を概観しようとするものである。

第1章でそうした問題の所在が明確にされ、第2章では一七世紀から第二次大戦終結までの移民の長期的な動きが概観される。一九世紀終盤から二〇世紀にかけてドイツは移民流出国から労働輸入国へと転換を遂げるが、外国人労働者に対して厳重な管理体制

制を築き移民としての定住を阻止する施策が第二帝政後半からナチの戦争期にまで一貫して見られること、むしろヴァイマルの社会国家で彼らへの管理体制が整備されたことが指摘される。

第3章と第8章がアウスジードラー、第4章が避難民・被追放民、第5章がユーバードラー、第6章が外国人労働者を主に扱うが、注目されるのは第7章で東ドイツの外国人労働者を独立した章として扱っている点である。ソ連軍関係者を除けば外国人は人口の1%強であり、一割弱を占める西ドイツとはその重要性は異なるが、アジア・アフリカ諸国などの発展途上国出身者が多いことは西との類似点であり、その大多数が稼得を目的として大抵は家族も伴わずに来ていた点でも、初期の西ドイツとの類似が見られる。彼らは一般市民から隔離されて厳しい監視下に置かれ、本国からも賃金を天引きされて厳しい生活を余儀なくされたが、一方で本国に財産を持って帰る一つの方法として、冷蔵庫・テレビなど東ドイツでは貴重な高級耐久財を購入しそれを本国で売却しようとしたために、「すべてを貪る人間」として市民から妬まれる対象になったという指摘は興味深い。体制側も市民の不満をそらすために、そうしたイメージをあえて修正しようとはしなかったのである。

本書を通読して実感するのは、「被害者としてのドイツ人」をフランス良く語ることがようやく可能になったのだという点である。ナチによる外国人強制労働や「民族的耕地整理」を相対化することなく、ドイツ人避難民・被追放民の苦難を語りうるという現状は、一つには著者の全体に目配りがきいた冷静な議論の賜物では

あるが、やはり「歴史認識」をめぐる彼我の差に思いをはずせ  
ずにはおれない。  
(小野寺拓也)